

ほとけ様が、ふーってした

青木 悦子

もうすぐぼくの誕生日。うちの誕生日は、じーじがバースデーケーキと、おすしを買ってきてくれる。

ケーキにろうそくを立てて、そこに火をつけてくれるのも、じーじがしてくれる。

「テレビと、部屋の電気を消して。」

そう言われると、ぼくはまるで、徒競争のスタートする時みたいに、ドキドキしてしまう。

口をとがらせて、少しだけ強ろうそくに息を吹きかける。ろうそくの火は、ゆらゆらとぼくの息に押されて横になり、細く線のようになって消えた。そのろうそくの先からは、白い煙が上がっていた。

「おめでとー！」

と、家族が言ってくれる。ぼくは、少し恥ずかしいけど、ワクワクして得意な気持ちになつてくる。

実は、ぼくのじーじはお寺のおしょうさん。たたみがたくさん敷かれた、広い本堂という所でお参りをしている。この時、小さいろう

そくに火をつけ、その火で大きなろうそくに本に火をつけて、ほとけ様の前に立てている。

それを見てぼくは、バースデーケーキにろうそくを立てて、火をつけてくれるじーじを思い浮かべてしまう。

本堂のまん中、少し高い所に、きらきら輝いているほとけ様が、静かに立っている。ぼくが本堂のどこに座っても、ほとけ様はぼくを見ている。三日月みたいな細い目が、優しく、ぼくも思わずニッコリと笑った。

「じーじ、どうしてそこにろうそくを立てるの。」

「ろうそくに火を灯（とも）すと、ほとけ様のみちびきが受けられると言われているよ。」

それに、この灯（あかり）は、ほとけ様やご先祖様を照らしてくれると言われているよ。」

このろうそくの灯（あかり）に、そんな力があるのだと驚いた。

ぼくが知っているろうそくは、バースデーケーキの、小さなろうそくしか知らなかった

からだ。

「じーじ、このろうそくの灯（あかり）はどうやって消すの。」

「この灯（あかり）は、息を吹きかけてはいけないよ。手をパタパタして消すよ。」

ほとけ様は自分で消せないのだ。あんなにドキドキ、ワクワクするのに、何だかかわいそうな気持ちになった。

お参りが終わると、本堂は静かになった。その時、ろうそくの灯（あかり）が、今にも消えそうに、ゆらゆらして細くなった。

ぼくは思わず、

「ほとけ様が、ふーってした。」

と、叫んでしまった。そんなぼくを、ほとけ様はいつものように、落ち着いた様子で見ている。今度は、嬉しそうな目をして笑っていた。ぼくも嬉しくなつて、胸の前で手を合わせて、小さく拍手した。ろうそくの灯（あかり）は、まだゆらゆらとしていた。